

F-10インドネシア人の信仰心

695. 重層信仰

世界の宗教勢力図から見るとインドネシアの地はヒンドゥー教、仏教、イスラム教、キリスト教という世界で名だたる宗教が拮抗してきた最前線である。

インドネシアの宗教はイスラム教が 90%弱、キリスト教が 10%弱、残りわずかをヒンドゥー教とその他という勢力図であり、人口から見る限りイスラム教国である。しかしインドネシア人、特にジャワ人のイスラム教は一般に知られている中東のイスラム教とは様相を異にしている。

宗教の様相がインドネシア独特である所以はシンクレティズム(syncretism)あるいは重層信仰といわれるように、イスラム教であってもイスラム以外の宗教要素を内在していることである。特にアニミズム(次項)的傾向はインドネシアすべての民族に共通する性向である。このような民族をこえる共通の感情があって初めてインドネシア人としての連帯に昇華したといえよう。

即ち典型的なジャワ人の場合、そもそもアニミズム信仰のところへ仏教とヒンドゥー教がやってきた。さらにイスラム教がやってきて、現在はイスラム教が支配している。しかしその宗教的態度は古い宗教を完全に捨てることなく次々と新しい宗教を受け入れた。

歴史的には仏教⇒ヒンドゥー教⇒イスラム教と入れ替ってきたが、実態は入れ替わりというよりも累積である。イスラム教のようないわゆる表向きの登録上の宗教は上着のようなものである。上着の下にインドネシア人の別の宗教が隠されている。あるいはカステラケーキの上に塗られたチョコレートにも例えられる。このような傾向はジャワ人において顕著であり、このような信仰のあり方は“重層信仰”といわれる。

このため一見イスラム教に見えても他の宗教が矛盾することなく同一人物の中に存在している。このような宗教的態度は日本人の神教と仏教の神仏習合関係と似ており、風土に由来する要因もあろう。

重層信仰であることは他宗教に寛容になる。インドネシアの歴史において宗教戦争らしきものはなく、宗教にありがちな排他的狂信は身を潜めており、宗教に伴う血生臭さがない。19世紀始めのスマトラ島のパドゥリ戦争(→278)は宗教が発端であったが、実際はイスラム教の中の主導権争いと植民地支配への抵抗であった。

インドネシアの建国の大原則であるパンチャシラ(→365)第一項目の「最高神への信仰」はすべての宗教の神を意味する。インドネシアはすべての宗教の存在を認める寛容を国是としている。しかしながらスハルト大統領の退任によって強権体制が弛緩した1999年以降にマルク州などで発生した暴動(→737)はインドネシアにおける宗教対立の存在を改めて認識させるものであった。

696. 潜在するアニミズム

イスラム教徒のインドネシア人が何かの災難にあって困った時、まず最初に“アッラーの神”に助けを請う。そこで効き目がないと見るやヒンドゥーの神々に切り替える。それでも駄目な場合の最後の切り札こそ古来の大地その他の諸々の精霊である。

この話は若干インドネシア人の宗教的態度を誇張しているにしろインドネシア人の宗教の根底にはアニミ

ズム (animism) が根付いていることを示唆している。

人類に最初に宗教として芽生えたものがアニミズムである。アニミズムは人や大地はもちろん山や岩や木などのあらゆる“物”に精霊あるいは霊の存在を信じ、それを畏れ敬う心である。

インドネシア人の重層信仰(前項)といわれる表面的な宗教の根底にはアニミズムがあり、この結果、既成宗教も他の国にない様相をおびている。例えば、バリ島のヒンドゥー教は本家のインドのものから変質しており、バリ・ヒンドゥー教(→719)といわれる。その特徴の一つはアニミズムの山岳信仰(本章)と結び付いていることである。聖なる山を背にしている寺院への礼拝は山への礼拝になる。

ジャワ人の行事のスラマタン(→705)はイスラム教のお祈りを伴うが、そもそもは村の精霊も参加するジャワ古来の共食儀礼である。イスラム教には神に食物を供えたり、神とともに食事するという習慣はない。

キリスト教に改宗したバタック人(→607)、ダヤク人(→624)、トラジャ人(→618)も葬式は民族古来の伝統に従っている。日常はキリスト教であっても死者の精霊を鎮めるためにはアニミズムに基づく伝統の儀式を欠かさない。

アニミズムはインドネシアの各々の民族の固有の文化と結び付いて民族文化の多様化をもたらしている。人形や木彫り(→934)やイカット(→929)は祖先の霊や諸々の神を表し、敬い崇めるとともに守り神としてきた。

宗教としてアニミズムは単純であるとか劣るとかいうものではない。乾燥の中東の風土には〈思索的宗教〉が相応しく、湿潤のアジアの風土には〈情緒的宗教〉が似合う。日本人も、早朝、東の空の太陽に礼拝する、大きな木に手を合わせる、滝や岩に注連縄を張る、など日本人の民俗にもアニミズムに起源があるものが多い。

このようなアニミズム傾向がインドネシア人にはより強く残っているというだけである。しかしこのためインドネシア人が迷信に弱く、ドクンといわれる呪師(→866)が現代社会に活躍する理由でもある。

アニミズムはインドネシア人の精神構造であって宗教として認められていない。公認宗教は唯一神信仰のイスラム教、プロテスタント、カトリック、ヒンドゥー教、仏教の5宗教だけである。インドネシアではヒンドゥー教、仏教も唯一神信仰に編成されている。しかしダヤク人などのアニミズムに基づく固有宗教が例外的に認められ、統計上はヒンドゥー教に分類されている。

697. 精霊信仰

かつて東南アジアは深い森に覆われていた。いや今でも覆われている。木々には生命がある。植物の生命は精霊となって森林と夜を支配する。人々は森林を畏れ、夜は隠れて生きてきた。妊婦は夜中に森へ行っってはならない。木の精霊に赤ん坊を奪われ流産するからである。

精霊への恐れは東南アジア全般に見られる現象である。タイでは「ピー」といわれる。お化けは熱帯の風土の産物である。人々は森林を棲家とする精霊を畏怖し奉ってきた。日本でも同じであり、社は原始林に覆われたまま残してある。夜を魍魎魍魎の躍動に委ね、人は昼の世界に専念してきた。

インドネシアの夜はお化け、妖怪、幽霊の類で溢れている。彼らが活動するのは夜である。一般にインドネシア人の夜は早く朝も早い。つまり早寝早起きが生活パターンである。夜の戸締まりをするのは泥棒よりもっと怖いものの侵入をふせぐためである。

お化けの類の中でインドネシア人の恐がる「ハントウ (hantu)」は死者の霊で“幽霊”のことである。ハントウ

は毎晩現れる場所が決まっている。幽霊が恐いのはこの世に恨みを残しているからである。生と死の境界をさ迷う妊婦の幽霊¹が特に多い。その中でもポンティアナ(pontianak)という目玉だけの女の幽霊が最も恐い。

独立戦争当時、あるいは9月30日事件後、インドネシア人による虐殺は首や手足の切断を伴った。インドネシア人の残虐性の表われとされているが、彼らは切断された死体は化けて出ないという俗信を実践しただけである。

お化けでもジン(jin)はアラジンの魔法のランプの大男のようなもので人間がコントロールできる。ツユル(tuyul)は死んだ赤ちゃんもしくは子供の霊で『遠野物語』でいう座敷童子^{ざしきわらし}のようなものらしい。

生きている人の霊の存在をも信じている。インドネシア人は大声でたたき起こされることを嫌がる。理由は寝ている時はその人の霊は体からはなれてどこかへ行っている、従って戻るにはゆっくりと静かに目覚めねばならない。トゥアンたる者は居眠りをしている運転手や女中をたたき起こしてはならない。

インドネシアでは諸々の精霊と折り合いをつけ、機嫌をとりながら生きていかねばならない。しかし昨今はこちらの精霊との共存の秩序は次第に乱れてきた。その要因は森林が細ってきたことと、もう一つは電灯である。電灯の普及で人は夜の外出を恐れなくなったからである。

ハントゥを追い払うにはドゥクン(→866)の呪術もさることながら近代科学技術の所産の電灯である。インドネシア人は就寝時に電灯を消すこと嫌がり、点けっぱなしで寝る人もいる。特にハントゥは蛍光灯の電磁波に弱いので、数日間蛍光灯をつけっぱなしにしておく²と退散するらしい²。科学的根拠は不明である。

⇒577.迷信深い

698. 稲女神/デウィ・スリ

農耕には栽培植物に適した耕作法と道具の使用が必要である。さらに栽培儀礼、食事法、世界観までがセットになって伝播してきた。インドネシアにもたらされた稲作には稲作儀礼を伴い、「デウィ・スリ(Dewi Seri)」という女神が稲の神様であった。

そもそも東南アジアはアニミズムの世界である。農耕儀礼の中でも稲の儀礼は特に念入りに行われるのは米の重要性による。米倉から種子を取り出す、播種、移植、初穂、打穀、収納の各々の段階で儀礼がある。

稲の信仰において米とは天界に住む男女の神の間の子供と見なされた。水田と大地は女性である。種まきと水やりは男性である。田植えから収穫までの稲耕作のプロセスはデウィ・スリの妊娠から出産である。

最も重要な儀礼は田植えの前に行う稲霊の祭りである。民族によって形式は多様である。例えばバリ島ではバナナの葉の上に供え物する。何れにせよ収穫までの稲の健やかな成長を祈念する。

稲の開花期に大声を出したり、鉄砲を撃つことはタブーである。何故なら“稲魂”が驚き逃げ去るからである。稲魂が去らないように竹の網で田を囲んだりする。ちなみに妊娠女性が下腹部に“岩田帯”をまく習慣はインドネシアにもある。胎児の靈魂の逃走を阻止するための帯^{おび}は稲作からの連想といわれている。

イスラム教に改宗した後はアッラー以外の神は存在しないことになっているが、デウィ・スリは生活神としてジャワ農民の心に位置づけられている。バリ島では米の女神のデウィ・スリは「デワ(dewa)」といいヒンドゥー主

¹ 女の幽霊のクンティラナックは美人である。男を見つけては親しくなって食い殺す。日本の幽霊は足がないが、インドネシアの幽霊は背中に穴があいている。〈編者註〉インドネシアの幽霊も足がないのが普通である。

² 〈編者註〉編者自身の実験によって確認した。

神ヴィシュヌの妻に位置づけられる。

そして稲の収穫の日を迎える。収穫はデウィ・スリのいわば出産である。稲は同性の女性によってアニアニ(→592)という小さな道具で慈しむように摘み取られる。ところが近年、信仰心が希薄になってバッサバッサと鎌で刈り取るようになった。

稲の起源については女神の屍体に由来するという説話はインドネシア各地に広く分布している。スンダでは女神の頭からヤシ、目から稲、胸からうるち米、女陰から砂糖ヤシ、他の肢体から草木が生えたという。

死体化生型の作物起源神話はオーストロネシア語族(→563)地域に共通しており、日本の“記紀”にもある。古事記には須佐之男に殺された大気津比売であり、日本書紀では月夜見に殺された保食神である。何れも女神の死体である。男神の死体は肥やしにしかならないらしい。

サゴ椰子(→770)を主食にしてきた東インドネシアの農民も米食を好むようになった。政府は彼らに稲作を奨励するも面倒がる。理由は播種から収穫までの儀式のステップが煩わしいとのことである。サゴ椰子にもそれなりの儀礼はあるが、稲は他の作物と比べても儀礼が殊のほか煩わしい作物である。

⇒592.稲作の互助組織

699. 山岳信仰

スマトラ島のマレー人はデンポ山(→101)を、ミナンカバウ人はマラピ山(→097)を、バタック人はプスク山(→607)を先祖降臨の地と崇めている。ジャワ人にとってムラピ山(→125)、ラウ山(→132)、ブロモ山(→149)、スメル山(→149)等々は信仰の霊峰である。ディエン高原(→133)、ラウ山はクバティナン(→707)の聖地である。



ラウ山のコトネゴロ廟 2011年1月10日編者撮影

アダット(→588)の由来について「アダットは山から、アガマは海から」という対句の言葉になっているが、インドネシア人の価値観では海より山に比重がある。アダットは山に由来する故に海に由来するアガマ(agama=宗教)に優越する。インドネシア人の山への崇拝は宗教以前の根源的なものである。

ヒンドゥー教並びに仏教に共通するインド哲学には須弥山^{しゅみせん}という聖山思想が含まれている。須弥はサンスクリット語の“スメル Sumeru”の音訳である。単にメル(Meru)とも呼ばれる。日本語では「妙高山」と意識される。

インド哲学の宇宙観によると、虚空^{こくう}に風輪^{ふうりん}という風(空気)の巨大な円筒が浮かんでいる。風輪の上に水輪が、水輪の上に金輪^{こんりん}がのる。金輪の上に大海があり、その中央にそびえたつのが須弥山である。

ヒンドゥー教がインドからインドネシアにもたらされた時、須弥山思想は在来の山岳信仰と結びついた。ジャワ島のヒンドゥー遺跡の多くは山中にあり、山岳信仰との関わり合いを示している。山岳信仰はヒンドゥー教によってより強固となり変質もした。

その後、ジャワ島のヒンドゥー教はイスラム教に取って代わり、インドネシアでのヒンドゥー教はバリ島に生き延びている。バリ・ヒンドゥー教を崇めるバリ人にとってアグン山(→179)は信仰の山である。バリ人にとってアグン山の存在は方向感覚、座る場所、寝る場所など生活の規範になっている。



ジャワ島においても山岳信仰と結びつくヒンドゥー教の残影は見られる。スラムタン(本章)のお祝いの食事に出るウコンで黄色に染められたナシ・トゥンペン(nasi tumpeng)というご飯は円錐型に盛り上げている。円錐型は山を表すメールである。ジョグロ屋根(→794)も同じであろう。

熱帯における高山は冷気の漂う神聖な場所である。高山は日の出と共に早朝は美しい姿で現れる。しかし日射で地表は暖められ上昇気流で午後には雲に隠れるため、人が山の全容を見るのは一日の内の限られた時間である。表われ方からも高山は劇的演出を高める。

日本に富士山は一つであるが、インドネシアには富士山そっくりのコニーデ型の美しい容姿の火山は数多く、しかもそのうちの多くは煙りをたなびかせる。高くなくてもブナングンガン山が崇められる所以は平野に孤高する気高い姿のためである。関東平野の筑波山や大山が崇められると同じ理由である。

⇒024. 聖なる火山

700. 巨石信仰

巨石信仰は世界各地で見られる普遍的な信仰である。ポリネシアの島々では巨石文化の遺跡があり、最も有名なのは太平洋の東の彼方のイースター島のモアイ像である。現在ではポリネシアの巨石文化の伝統は絶え謎の文化となっているが、オーストロネシア系民族の所産である。巨石文化を通してインドネシアはポリネシア文化の一端に位置している。

インドネシアの巨石文化の起源はヒンドゥー教化以前にさかのぼり、その遺跡はスマトラ島のパスマ高原(→101)、トバ湖、ニアス島(→096)、スラウェシ島のバダ谷(→205)、バリ島やジャワ島にも石像が見られる。一事例としてヌサトゥンガラ列島のスンバ島の巨石墓を紹介したい。

スンバ島はイカット、騎馬戦などの特異の文化で有名であるが、巨石墳墓という形で巨石文化が今日も生きている。とんがり屋根の住居からなる村が小高い丘の上にある。中央に広場があり、巨石の墓が鎮座する。明日香村にある蘇我入鹿の墓と伝えられる“鬼の雪隠”と同じである。家々は墓の周りに窮屈そうに並んでいる。

遺体は子孫を見守るかのように家の前に大きな石の下に埋葬される。墓石は不浄とか神聖という特別な場所ではないらしい。子供が上って遊んだり、食品や洗濯物が乾してあり、生活の中の一部である。

村の偉い人が亡くなると盛大な葬式が営まれる。水牛と馬が死者の従者として犠牲にされる。首長の遺体は金の装飾品をつけ、何枚ものイカット(→929)に包まれる。

最後に死者の威厳にふさわしい墓が作られる。墓ができるまで半年は遺体は家に安置される。埋葬は遺体を収めた石垣の上に大きな平たい石が乗せられる。偉い人ほど石は大きく、彫刻入りの墓碑が建てられる。

葬式のハイライトは“石曳き”である。奇習として TV でも紹介されたことがある。墓石の石切り場かなり遠い山にある。どれだけ大きな石を切り出して運ぶかは身分次第である。奴隷を多く抱える首長は何百人をも動員して石曳きを行った。

土木工事のための新技術は一切使われない。何百年来続いていると思われるコロの上を綱で引っ張る方

法である。日本の古墳時代の土木現場から発見された“スラ”という橈^{そり}状の運搬具とそっくりな用具が使われている。

巨石を運ぶ苦勞を見ればブルドーザーの使用を推奨したくなる。しかし諏訪神社へ行って“神木”という名の丸太をクレーンで下ろすことを提案しても受け入れられないと同様に彼らは聞く耳を持たないであろう。

しかし最近ではいささか事情も変わりつつあるようである。東スンバの 1988 年の首長の葬儀では従来の巨石に代わりセメントの使用の墳墓の実例が紹介されている。昨今の首長の経済力では奴隷社会には只で動員できた労働力の確保が次第に難しくなってきたようである。

⇒220.スンバ島

701. 金属信仰

ジャワ人は金属性鉱物に対して不思議な魔力を持つものとして畏敬を払ってきた。例えばスカルタのクラトン(王宮)の庭の一角に“隕石”が屋根つきの建物に恭しく奉られている。神聖なものとして花や食物が供えられる。天から燃えて落ちてきた石に金属の存在を認め、魔力の存在を確信したのであろう。

バリ島のウク曆(→646)のパグルウェシ(pagrwesi)は「鉄の日」という意味で重要な祭日である。鉄は悪霊から人を守ってくれるので鉄製品に感謝を捧げる日である。特にシンガラジャのお祭りは盛大である。

スマランの三宝廟(→135)では古い錆びた錨^{いかり}が御神体のように奉られている。鄭和(→666)の乗ってきた船



左 Jagur、右 Ki Amuk

を偲ぶ遺品である。ジャカルタのジャグル(Jagur)砲(→154)、バンテン(→115)のキアムック(Ki Amuk)砲の金属製の大砲もご神体である。ちなみに両者は夫婦ということになっている。

家屋を建てる際の儀式には大黒柱の位置に金属片を埋め

る。地下界からの悪い精霊からの家を守る呪^{まじな}いである。金属の不朽の生命、金属の持つ冷やかさへの憧れは金属信仰に昇華したものであろう。

ジャワでは女の子は寝る際に夜の枕の下に鉄^{はさみ}を入れる慣習がある。映画『少女ポニーラ』は父親から憎悪された幼女を見かねたその家の女中は子供を連れて家出する。少女を育てるために女中は売春婦にまで身を落とす。どん底の社会で成長した少女はやがて客としての男を迎える際に鉄で殺す。少女の守護神として鉄が象徴的である。

バリ島では死者に紐で中央に四角の穴のあいた中国の古銭を連ねた帷子^{かたびら}の飾りにしている。死者を悪霊から守る魔除けであろう。

ジャワの伝統楽器のガムラン(→011)は青銅製の打楽器が主体である。最も大きい銅鑼^{どら}の「ゴン(gong)」は直径1尺^{しち}に近い。ゴンはガムランを象徴する楽器であることから曲の始めと終りに登場する。神様の楽器とされてお供えも受ける。

インドネシアで行われた国際会議に出席した際に大統領が出席するというので 1 時間も早くから会場で

の着席を求められた。大統領がゴンを打ち開催を告げるとゴンの重々しい音が会場に響きザワザワしていた場内は一挙に静粛になった。ゴンは東南アジア社会の基層にあるドンソン文化(→981)の銅鼓を引き継ぐの
 だろう。

クリス(次項)はマレー世界の共通項といえる独特の剣であるが、クリスに武器以上の守護神の意味を求めるのも金属信仰の一環であろう。クリスの鍛冶師はギルドを作りその技術は一族だけに受け継がれてきた。

インドネシア人の潜在意識に“土農工商”があり、手で仕事する職業を軽んじており、トゥカン(tukang)といわれる職人の社会的地位は高くない。しかしこの中で金属を扱う鍛冶屋(→872)は普通の職人とは異なる待遇を受けてきた。特にクリス職人は畏敬され、職人というより神官の扱いのようである。

702. 守護神のクリス

始めは単なる武器であったと考えられる「クリス(keris)」という不思議な形の剣は守護神として精神的な意味を持つようになり、魂として崇められるようになった。患部にクリスを触れて病気を治すドクン(→866)もいる。



クリスの魔力の源泉となる神聖は刃にある。青黒い鉄の地に波紋のあるクリスは生き物として扱われた。刃がくねるのは蛇を表す。蛇の意味のナーガ(→953)はサンスクリット語で水を司る神であることからヒンドゥー教の影響も窺える。

バリ人は公的な集会はクリスを所持して出席した。何か所用で出席できない場合はクリスを届ければ本人に代り出席したことになる。身分の低い女性との結婚式はクリスが代役を勤める。クリスはそれを所有する人と一体であり、人は各々の人格に見合うクリスを持つ。もし平民が分不相応の神聖なクリスを所有すれば平常心を失い、不幸に見舞われる。聖なるクリスと共に妖なるクリスもある。

超自然な力の具わったクリスにまつわる話は多く、どのような不思議なこともありうるとインドネシア人は信じている。中には外国人も“空を飛ぶクリス”という信じられないような話を実際に見聞したことが明記されている。

パソパティ(Pasopati)という予言者がクリスを授かった王子が生まれると予言し、やがて金のクリスをつけた王子が生まれ、このクリスで王国を再興した。パソパティのクリスは国王の持つクリスである。王家に伝えられるクリスはいわば国王の権威の源泉である。しかるべき伝説が伝えられ、そのクリスがどこかに消えてなくなること、あるいは曇りが出ても王の勢力の衰えたことを意味する。

インドネシアにはクリスにまつわる伝説がいくつかある。最も有名なのはシンガサリ王国を築いたケン・アンロック(→334)にまつわる呪いのクリスの歴史物語である。

ケン・アンロックは領主の妻への横恋慕から領主を殺害するために鍛冶屋にクリスを作らせた。鍛冶屋は6カ月の期間を申し出たが待ち切れなくなり、未完成のクリスを取り上げて鍛冶屋を突刺して殺した。

死の前に鍛冶屋は呪う。「ケン・アンロックはこのクリスで死ぬ、そして子孫もまたそのクリスで死ぬ」と予言した、鍛冶屋「ムプ・ガンドリン(Mpu Gandring)」の呪いである。

ケン・アンロックは領主にとって代わり領主の妻ケンデデスを后にした。クディリ王朝をも乗っ取りシンガサリ

王朝を打ち立て 21 年が過ぎた。

成長したケンデデスの前夫の子供は父の敵として呪いのクリスでケン・アンロックを殺害して王についた。新王は異父弟のケン・アンロックの子に鶏闘のいさかいから殺されて異父弟が三代目の王になる。その際も例の“妖剣”クリスが使用される。その王もまた二代目の王の子に殺される。その後も同様に殺される。呪いを絶ち切るため、そのクリスはジャワ海に沈められ、竜になったという伝説がある。

⇒935.工芸品・クリス

703. 陶磁器への憧憬

インドネシアの国立博物館、あるいは各地の博物館においても陶磁器の陳列は大きな場所を占める。これらの陶磁器は中国から輸入されてスルタンやラジャの宮殿を飾っていたものであろう。各年代の秀逸の美しい作品ばかりである。

陶磁器は実用品のみならず装飾としても重宝された富と権力の象徴である。宮殿でも民家でも中国の陶磁器を宝物として大事にしたことが、多くの陶磁器の残された理由である。インドネシアは中国の陶磁器が運ばれた海のシルクロードの重要な中継点である。単に通過するだけではなく多くの逸品がこの地で先取りされた。

ダヤク人のロング・ハウス(→941)などの伝統民家の中を見回すと暗がりの中に大きな陶器の壺が数個見える。家財道具らしいものはあまりない、あっても壁に架けるか天井からつるしてある。この中でしかるべき場所に鎮座する陶磁器の存在は威を放っている。

陶磁器には穀物などの食料のみならず衣類など大事な物が貯蔵³されている。貯蔵庫としての陶磁器の優れているのは特に鼠の害、白蟻からも守ることである。熱帯の白蟻はコンクリートでさえボロボロにする。

また陶磁器の皿の用途は食事の際に用いる。東南アジアでは食事を盛るのは普通はバナナの葉であるから皿の使用は儀式的の食事である。

陶磁器の皿が死者の埋葬用に使用されていた。棺^{ひつぎ}の中の死者の体の手足のところ³に中国製と見られる皿が置かれていた。やがて腐敗し、ついには消えてなくなる死体の関節部分に皿だけが残される。死者と陶磁器の組み合わせの意味を考えてみるに、何物をも土に還元する東南アジアの気候風土であるが、陶磁器にはいかなる時の流れもなんの変化ももたらさないだろう。陶磁器は作られた時の美しさをそのまま保つという意味で永遠不滅の証ではなかろうか。

博物館の展示品の中には壺の口の部分が欠けたものがある。陶磁器の霊力を授かるためにわざと欠いてその破片を粉にして重病人に飲ませたものという。

タイのバンコックの名所に陶磁器を壁面にタイルのようにはめた寺院がある。熱帯で陶磁器が大事に保存されてきたのは、温帯の人間が単なる美術品として評価する以上の不滅信仰的な存在であったからであろう。チルボンのモスクにも装飾として陶磁器が使用されている。

近代技術はコストの安いポリタンク、ポリバケツを造り出し生活は便利になった。石化製品は地球上に溢れている。このために海も山も森も汚くなった。そして人の心から物を大事にする信仰心もなくなった。

ちなみに現在、インドネシアで製造されている陶磁器は野焼で焼かれた実用品である。。ケンディ(kendi)

³ 水の不自由な所では水の貯蔵の甕であり、天水を受ける入れ物でもある。

という素焼きの甕^{かめ}は沸かした湯を入れておいて置くと気化熱で水の温度が下がり飲みやすくなる。陶器の焼成温度が低いと壊れやすく、嵩張るのでお土産には適していない。

704. プサカ/家宝

インドネシア人は超自然な力を持つものへの憧れが強い。万難を排して入手に努め、自分の守護神として大事に保管し子孫に伝える。このような“家宝”はインドネシア語で「プサカ(pusaka)」という。ちなみに『インドネシア・プサカ』という愛国歌がある。プサカの代表的なものがクリス(前々項)であるが、プサカはクリスに限らない。



呪術杖

スマトラ島のバタック人(→607)では“呪術杖”がプサカとして子孫に伝えられる。アニミズム芸術を思わせるような人と聖獣の像が入念に彫りこまれた杖である。クリスと同様に日本でいう神棚のような所に保管されるべきものである。重過ぎるが、ゆめ、散歩の杖などと想像してはならない。

ジャワ王家にはクリス、ワヤン(→904)、ガムラン(→910)など多種多様のプサカが伝えられている。ジョグジャカルタ王家の代表的プサカは8種の金製品であるといわれる。プサカを容れる箱もプサカになる。香をたいて厳粛に保管される。年に一度、プサカを洗うが、その洗った水は庶民が大事に持って帰る。飲むと霊験あらたかで病氣も治る。

猛威を振ったペストを鎮めるため、旗をたててプサカが巡行した。20世紀の話である。プサカのクラトン(王宮)巡行の際は架線が外されるとのことである。京都の祇園祭では架線が鉾の巡行に物理的に妨げになるから外すが、プサカの場合は天上を遮ってはならないからである。

プサカでなくてもインドネシア人は何かを御守り⁵として身につけている。男性は独身でも指輪をしている。指輪は単なる装身具のみでなくお守りの意味もある。効用のある石を身体に付けると石の霊力が伝わる。

宝石のこともあるが、普通の石としか見えないものもある。然るべき場所で然るべき時間に探した石が霊験あらたかという評判が立つと大勢の人が押しかける。ただの石ころは由緒ある石になる。石のお守りは買うものでなく、自ら採取するか、然るべき人から与えられるものである。指輪にしないで石そのものをお守りとして筆箱に持っている人もいる⁶。

お守りは木の葉や芽であることもある。ドゥクン(→866)が秘かに教える聖なる地の聖なる木を特定の日の特定の時間に摘まれねばならない。

メッカ巡礼の際に聖地で拾ってきた石は何よりのお土産である。巡礼に行けなかった人はお土産の石をお守りにする。これはインドネシアのイスラム教徒だけでなくイスラム教徒全般の慣習であろう。

一昔前のインドネシアの入国の荷物の検査が厳しかった頃、日本人駐在員のトランクの怪しげな所から神社の“おふだ”がでてきた。家族の心づかいは本人も思いがけなただけに、驚きの表情を検査員に見答

⁴ インドネシアでも陶器の製造は行っている。⇒川崎千足『インドネシアの野焼土器』

⁵ 女性がつけるお守りにスックがある。スックは恋の魔法で男性がひきよせられるらしい。ドゥクンに小さなダイヤや金を身体に埋め込んでもらう。⇒柳沢有紀夫編「アジアのツボ 東南アジア」2002 スリーエーネットワーク

⁶ <編者註>7割がたは普通の石でパワーストーンではない。

められ「中身は何か？」の質問に答えられず、開けるのを拒否すれば追及が厳しくなり四苦八苦した。ふと思いついて「ジマツ(jimat)=御守り」であることを説明すると検査官は直ちに「ノー・プロブレム」と諒解し、危機的状況は急転直下の解決に向った。

705. スラマタン/共食儀礼

「スラマタン(selamatan)」はインドネシア人、特にジャワ人の日常生活における“ハレの日”の共同で食事する行事である。

①誕生、割礼(→817)、結婚、妊娠、死亡などの通過儀礼、②家の新築、井戸堀、引越など、③名前の変更、めでたい年齢、旅行への出発、病気の快癒、卒業など随時、④役所や会社が行う何かの記念日、など何らかの理由があればスラマタンを催す。

共同で食事することは多かれ少なかれどの民族も有する社会習慣であろう。このうち「共食儀礼」といわれるものは共同体意識や連帯感が強化されるために共に食事することが儀礼化したものである。

普通のスラマタンは夕方に隣人、親族、友人など 10～15 人が集まって食事をする。出席者は各家代表の男子だけが一般的である。平穩無事な生活を祈願する儀礼であるからまずイスラム教の先達がコーランの一節を朗詠する。ちなみにスラマタンの語源の「スラマツ(selamat)」は平穩の意味でインドネシア語の挨拶語である。祖霊をはじめ諸霊に食物を捧げてから共食に入る。食事そのものも形だけで厳粛に行われ、時間は談話時間も含めて 30～40 分で終わる。食事は銘々に分けて持って帰る。

スラマタンの体裁はイスラム教の儀式のように見えるが、そもそもスラマタンの起源はアニミズム(本章)の精霊・祖霊崇拜の土着的なものである。それにイスラムの形式が後から整えられたものである。近隣社会の調和と秩序をみずから演出するものである。

もちろんイスラム教であるからアルコール類はなく、日本の披露宴のようなくだけたものではない。通過儀礼のスラマタンは一回限りでなく頻繁に繰り返されるものがある。例えば結婚の場合は7回⁷である。

死亡に伴う葬儀の際は埋葬直後から最終の 1000 日目まで合計 8 回になる。トラジャ人、バリ人など長期にわたり盛大な葬儀を行うことで知られているが、ジャワ人の葬儀もスラマタンを行いそれなりに念がいつている。日本にも葬式後、7 日毎に 49 日まで仏事があるが、最近では簡略化されている。

食事は米飯、鶏肉、副菜、菓子、果物と日頃の食生活から見ると御馳走である。きれいに形どられた御飯を中心として煮物、揚げ物という料理方法の組み合わせである。しかしスラマタンは単なる御馳走ではない、食品の一品毎には象徴的な意味がある。スラマタンの各々の段階に対応する料理が定められている。

スラマタンを催すことは非常な経済的負担を伴う。それでもジャワ人はスラマタンを欠かさない。ジャワ農民の貧困の原因の一つはスラマタンのやりすぎだという指摘もあるくらいである。

最近では役所や会社が創立記念日などに全従業員を集めた大掛かりなスラマタンを催す。食堂の食事風景とは異なり神妙な顔をして食膳に向かっている。役所や会社のスラマタンには福利厚生の意味合いもあるだ

⁷ 結婚の際は下記の7段階のスラマタンがある。①1週間前－準備の会合、②前日の午前－式場の用意、③前夜－村霊への告知、④前夜－神への祈り、⑤当日夜／翌日－終了の告知、⑥5日後－日サイクル一巡の告知、⑦35日後－日・曜日サイクル一巡の告知。 ⇒関本照夫著『ジャワにおける儀礼と食物』

ろう。

706. ワフユ/国王の権威

インドネシア、特にジャワでは無用な争いを避け、平和な人間関係を作るための行動様式が尊重される。ゴトンロヨン(→593)とかムシャワラ(→594)というインドネシア社会の行動原理の基をたどれば“秩序と調和”の人生観にまで行き着く。

人間のあるべき姿としてジャワ人の上品(ハルス→634)な物腰の所以は、秩序と調和の社会的成熟の証である。そこでは自我を主張することは非社会的で礼儀を欠く行動とみなされる。インドネシア人、特にジャワ人の封建的体質は政治的に遅れているというよりは、秩序と調和を志向する人生感の発露という要素を勘案しなければならない。

オランダ植民地以前のジャワでは国王が君臨していた。ジャワの国王とは権力を持った支配者というより神聖な権威を持った神の代理人である。国王は神の化身であり、超自然的な力を持っている。世俗的な統治者の上に存在し統治者を精神的に補佐する。

インドネシア各地、特に、ジャワの影響下の地方に存在した小さな王も小さいなりに同様の宗教的権威を持っている。身分の高い人はその身分ゆえに偉いのである。貴人の体内には“白い血”が流れていると信じられている。もしそうでなければ宇宙が壊れる。

「ワフユ(wahyu)」というインドネシア語はアラビア語の語源「神の啓示」の意味の宗教用語である。ワフユは宇宙を飛ぶ光の玉であり、手に入れた者のみが正当な権力者となる。ワフユは天意による正統性の証であり、ワフユを失えば権力の座を去るのみである。

スカルノ大統領はワフユをなくしたが故に権力の座から去った。スハルト大統領⁸も同じである。森林火災、旱魃、飢饉、ルピア暴落、通貨危機、心臓発作、連鎖暴動はその証である。ハビビ大統領(→454)は見方によれば傑出の大統領であるにもかかわらず短期の暫定政権に終わった。ジャワ人によればハビビ大統領には始めからワフユがなかった。

ジャワの国王の宗教的権威のよってくるところはヒンドゥー教の影響を受けていると考えられるが、ジャワ本来の神秘主義に基づく宇宙観の所産でもあろう。国王が神聖であるゆえんは血統である。血統は女神コロ・キドゥル(→949)によって保証される。聖なる花(→053)や聖なる山(→024)とかクリス(→702)にちなむジャワ固有の権威付けがある。

スルタン・アグン王(→337)はオランダの駆逐に失敗し、マタラム王国はオランダを受け入れざるをえなくなった。そこで王室はオランダ東インド会社クーン総督(→336)はヨーロッパ人とパジャララン王国(→260)のタヌラガ王女の間生まれた正統なジャワの後継者としてその存在を権威付けた文書があるらしい。

国王の権威が過大視される社会の欠点として社会全体が現状維持を最善とし、退嬰的になり活力がなくなる。これがオランダ進出時のジャワの王室の有様であった。オランダがかくも少量の武力で人口の多い地域を支配できたのはジャワ王朝の宗教権威を巧みに利用したからであろう。

国王への反逆を宗教的に容認しないジャワ人は末期症状の乱れた世を救うことができるのはラトゥ・アディ

⁸ スハルト政権末期の頃、ジョグジャカルタのスルタン・ハムンクブウォノ10世が夢を見た。その夢はワフユがジャカルタからマタラム移るというものである。このような噂が広まりスハルト政権の失墜を加速化させた。

ル(→339)の出現を待つだけである。

707. クバティナン

ジャワ人であるかぎり神秘主義(シンクレティズム)と何らかのかかわりあいを持っているといわれる。神秘主義についていろいろな解説があるが非常に難しく、その中で意味の解る所だけを拾い上げると次のようなことになる。「人間が純粹になると内部にある神秘的可能性でもって宇宙の真理に接近でき、さらに心の平安が得られる」

禅の瞑想のような境地に達するには厳しい修業が必要である。山中や洞窟にこもり、断食、禁欲、瞑想を行わなければならない。その霊場として有名なのはラウ山(→132)、スندان・スマンギ(ジョグジャの近辺)、グア・シランディール(チラチャブ近くの洞窟)、ディエン高原のグア・スマル洞窟(→133)である。

神秘主義のジャワ語の「クバティナン(Kebatinan)」は「内なる自己」という意味である。クバティナンには色々な会派があるが、思想の差というよりはグル(guru=師)から弟子へと奥義が直伝されるという教え方にある。

ジャワ人にはイスラム教の受入の当初からイスラムの中では神秘主義傾向のあるスーフイズム(→711)を伴ったものであった。今では多くのジャワ人はイスラム教徒でありながら、クバティナンにも所属している。一見、矛盾に見えるがクバティナンの思想はイスラムの神秘主義の線に従ってイスラムの言葉と枠組が用いられているので、クバティナンに参加しているジャワ人も何ら矛盾を感じない。日本でいう“神仏混淆”である。クバティナンの中には反イスラムを明らかにする流派もある。クバティナン信奉の潜在意識にはアラビア人(インド人)による宗教侵略に抵抗するジャワ文化至上があるように思う。

敬虔なイスラム教徒、特に外島のイスラム教徒から見るとクバティナンは釈然としない存在である。インドネシアで宗教とはパンチャシラ(→365)の“最高神への信仰”で唯一神への信仰とされている。仏教もヒンドゥー教も唯一神に体系化されている。

クバティナンはスハルト大統領になってから宗教ではなく信仰、即ちジャワ固有の文化として認められた。管轄も宗教省でなく、教育文化省である。クバティナンは大小様々な教団を届け出ており、パンゲストゥなどは全国組織を持つ最大の教団⁹である。

ジャワでのクバティナンの実践は神秘主義という個人的な狭い領域に限定されていない、より広い社会思想の概念をも有するようである。自我への執着を捨て個人の心の平安を得ることは、即ち、社会の秩序と調和への願望に発展する。個人と社会の秩序と調和は一線上にある。いわばクバティナンは現状容認の哲学であり、ジャワ人の保守的体質とも結び付いている。日本にも“仙人”が知られている。ジャワの神秘主義もいふならば仙人思想というところであろうか。

1976年の「サウイト事件」は農林省の元役人のサウイト・カルトウィボウォ(Sawito Katrowiboro)は山頂で得た啓示によってスハルト体制批判の政治的発言を行った。ただちに活動を禁止されたが、クバティナンの一派で多くの著名人を巻き込んだため注目された。しかし一般的には“仙人”に革命思想は馴染まないようである。

⁹ 「クバティナン」はジャワの神秘思想を報じる各種団体の総合名である。全国的規模の教団はパンゲストゥ(Pangestu)、スブド(Subud)、スマラー(Sumarah)、サプト・ダルマ(Saptra Darma)の4大教団であるが、その他無数の団体を抱えている。多くはイスラム教と妥協的な団体であるが、イスラム教に対し敵対意識の強い団体もある。

708. バリ人の世界観

当初、混沌としていた宇宙は次第に地下の冥界と天界に分離する。両者の境界に地上界が存在する。地下の基盤にブダワン(Bedawang)という大きな亀がいる。その亀の上に2匹のアンタボガ(Antaboga)神という蛇の神様が地上を支える。冥界は蓋がされており真っ暗である。亀が時として身動きすれば地震になる。

亀が地下において大地を支えるとしている、という思想はインドでも中国でも共通している。亀の特異な形状と生命力の強さからの連想による同じ発想である。中国の天の4神の一つ玄武^{げんぶ}は水の神で亀に蛇が巻き付いた形で表され、北の方角を司る。ちなみに東は青竜^{せいりゅう}、西は白虎^{びやっこ}、南は朱雀^{すざく}である。中国人の信仰する蓬萊山^{ほうらいさん}は巨大な亀の上にある。

天界は神が住む所である。人も死ねば霊となって天に行ける。冥界と天界の間にある地上界は人が住む暫定世界である。神々はお祭りに降臨してくる。その場所は聖なる方角であり、パドマサナ(padmasana)という祭壇が儲けられる。

バリ人の世界観はマハーバーラタ(→946)に記されているヒンドゥー教神学に基づくものでバリ固有のものではないが、バリ人の二元論によるコスモロジー(世界観)の形成に資している。

バリ人によればカジャとクロッド(→643)がその対極である。二元論とは世界のすべての事象を説明するのに常に二つの極に分ける考え方である。《天と地》、《善と悪》、《男と女》、《山と海》、《東と西》、《右と左》、《生と死》、《頭と足》というようにである。すべての事象はその対極の中に存在する。山と海の対極の中に人の住む村がある。天界と冥界の対極の中に人生はある。二元のバランスの中に自己の存在を確認する。

二元論では善と悪は別れて対立している。しかし対極であってもその役割はしばしば混乱する。善と悪は互いに補いあって一つの全体をつくる。

善獣バロン(→954)と魔女ランダ(→955)はバリ風による二元論の具象化である。バロンは正を表しランダは悪を表す。両者は対立し闘争する。しかしその闘争は終わることはない。正と悪が闘えば必ず正が勝つという単細胞思考をバリ人は受け付けない。バリ人の意識の中にはバロンもランダもセットとして存在している。

そもそもヒンドゥー教では主神のシバ神も創造の神であると同時に破壊の神でもある。シバ神は主宰神でありながら魔術も使う。善と悪は混然一体となっており悪の存在は積極的に肯定されている。

バリ島はヒンドゥー教文化が生きている。しかしバリ文化はヒンドゥー文化そのものではない。ヒンドゥー教以前のバリアガ文化(→660)の混合文化であるが、無視できないのが中国文化(→981)の存在である。バリアガ文化にはバロンや竜信仰、中国古銭の信仰など中国文化が浸透しているように思う。

⇒719.バリ・ヒンドゥー教